ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

三度目の赤字
（交錯する期待と失望）

先月１５日、三和銀行を主体とするＵＦＪグループが、今３月期決算で１兆円以上の不良債権処理を行い大幅な赤字決算となるという業績下方修正を発表した。当日その報道を好感して銀行株は買戻され、崩落の渕に立たされていた日本株式市場も反発に転じた。その意味で、株式市場はＵＦＪグループの決断を好意的に評価したように見える。しかし、この風景は「いつか見た」風景に似ている。これに似た景色を私はこれまで２度ほど見てきた。

阪神大震災の悪夢覚めやらぬ９５年の１月も末、住友銀行が１，０００億円を超える赤字決算に踏み切ることを発表した。株式市場はその決断に驚いた。赤字決算を異常なまでに恐れていた邦銀が遂に赤字に踏み切ったのだ。株式市場は住銀の行動を評価し、住銀株には買いが殺到した。その流れは銀行株だけでなく市場全体に波及し、株式市場は反騰に転じた。住銀の赤字決算を、大手銀行が本格的に不良債権処理に動き出すメッセージと受取ったのである。

しかし住銀の赤字は、不良債権問題の終りではなくほんの始まりに過ぎなかった。

９７年９月、今度は日本最強銀行と云われていた東京三菱銀行が、同年９月中間決算で何と９，０００億円を超える巨額赤字決算に踏み切った。不良債権を１００％処理するというその内容は、他の大手銀行だけでなく金融関係者に衝撃を与えた。私もその決断に敬意を表し「東京三菱の決断の意味するもの」というレポートを書いた。そして東京三菱の行動は、邦銀が今度こそ不良債権に見切りをつけて新たな展開を目指すに違いないというサインと市場は受取った。銀行首脳の「不良債権処理は峠を越えた」という言葉を多くの人は信じ、株式市場もそれを信じようとした。

しかし、それも束の間のことだった。

２ヵ月も経たない９７年１１月に悪夢は訪れた。まずインターバンク市場から締め出された三洋証券が破綻した。そして続いて拓銀、山一証券、徳陽シティと１ヵ月の内に４つの上場金融機関がバタバタと倒れた。富士銀行すら株価が危険水域に迫り、危ないと云われた銀行の窓口は預金引出しの人で溢れた。あの時は私も金融恐慌が発生するかも知れないと思った。信用収縮の波は日に日に広まり、銀行から借入金返済を強要される企業が相次いで、「貸し渋り」「貸し剥がし」などという言葉が生まれた。

結果として、政府は巨額公的資金を金融システム安定に投入することを余儀なくされた。公的資金投入の引き金となった拓銀や山一の破綻は金融当局（大蔵）の深謀遠慮と見られなくもないが、そうだとしても東京三菱の決断など何処かに吹っ飛んでしまった。又しても市場は欺かれたのである。

あれから２年、期待と失望を交錯させながらも株式市場は持ち直し、大手金融機関を中心に金融再編の動きが相次いで金融危機は過ぎ去ったように思われた。大手銀行の自己資本比率も、公的資金投入効果もあって曲がりなりにも１０％を超え、海外市場でのジャパン・プレミアムも消えてなくなった。しかし、それも今となっては見せ掛けの安定に過ぎなかったようだ。

ＩＴバブル崩壊に始まった米国の景気後退は、我が国の景気持ち直しが米国依存に過ぎなかったことを明らかにした。株式市場が急落の動きを見せはじめると、またぞろ金融不安が囁かれるようになった。そして冒頭のＵＦＪグループの巨額赤字決算発表につながった。

今回のＵＦＪの行動は、さすがに住銀や東京三菱の赤字決算発表時のような驚きを与えはしなかった。株式市場崩落に一定の歯止めをかけたとは思うが、日本の金融機関の不良債権処理が未だ道半ばであることを明確にした。そして不良債権全体の輪郭が明らかなってきた。

金融庁は１７日、日本の全金融機関が持つ要注意先以下に分類される債務者向け融資が１５０兆円あることを公表した（その内の担保や優良保証で保全されていない貸出金が８１兆円あり、それが不良債権総額と云われてきた）。全与信残高に占める割合は実に２２％に達している。

三度目の赤字の次、四度目の赤字は許されるだろうか。市場の暴力の前に残された時間は多くはない。若し今度失敗すれば、市場の暴力は銀行ではなく国の債務（国債）に向かうのではないか。私はそんな風に見ている。

《複製・転載等はご連絡下さい》
TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp